

徳島の街や自然をそのままアートに!

チームラボ
代表

+ 猪子寿之

徳島経済研究所
専務理事

× 田村耕一

世界を魅了するチームラボのデジタルアート

田村：私がチームラボの作品に興味を持ったのは、東京スカイツリーの1階に描かれた巨大な「隅田川デジタル絵巻」を見てからです。時間軸を超えた東京の動きを精密に描写しており、まさに目が釘付けになりました。

5月に開催された伊勢志摩サミットでは、国際メディアセンターにチームラボの作品「世界はこんなにもやさしく、うつくしい」が展示されていましたが、取材に来た世界のメディアに

も日本の美しさが伝わったんじゃないかと思います。どういう経緯で出展されることになったんでしょうか。

猪子：エントランスで何かするという話があって、いろいろ提案して最終的にあの作品になったんです。

田村：日本の美を感じるという意味では、あの作品を見ていただいてよかったなと思います。書道家の紫舟さんとのコラボも素敵でした。

日本科学未来館で開催した大規模な企画展



左から 田村、猪子氏



東京スカイツリーの壁画(隅田川デジタル絵巻)



世界はこんなにもやさしく、うつくしい
(伊勢志摩サミット国際メディアセンター)

チームラボ 踊る！アート展と、学ぶ！未来の遊園地



花と人、コントロールできないけれども共に生きる、
そして永久に - Tokyo



Floating Flower Garden; 花と我と同根、庭と我と一体



お絵かきタウン



光のボールでオーケストラ

「チームラボ 踊る！アート展と、学ぶ！未来の遊園地」(2014年11月29日～2015年5月10日)が、モネ展、ルーヴル展に次いで、2015年の全国の美術展の観客動員数第3位(新美術新聞調査)だそうです。私も行きましたが、平日にもかかわらずたくさんの人出で、チームラボの人気のすごさをあらためて感じました。

今シリコンバレーで展示中の「teamLab: Living Digital Space and Future Parks」(2016年2月6日～)は、日本科学未来館での展示をさらにバージョンアップした感じですか。

猪子：そうです。建物が2つあって、手前が科学未来館という「アート展」で、奥の建物が「未来の遊園地」です。

田村：反響はいかがですか。シリコンバレーは、今まであまりアートのイメージがないんですが。

猪子：それが、いいんですよ。

今世界は、シリコンバレーを中心に動いたり、前に進んだりしているんですね。グーグルもアップルもフェイスブックもユーチューブも

インスタグラムも全部あるじゃないですか。自動車会社のテスラもあって。経済でも、シリコンバレーやサンフランシスコを中心に、お金持ちも増えてきている。アートはあまり買わないのか、ギャラリーが一つもなくて、アートに興

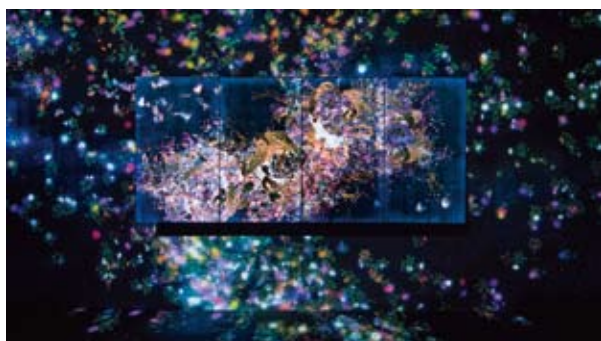
「teamLab: Living Digital Space and Future Parks」



シリコンバレー Pace Art + Technology



Black Waves in Infinity



境界のない群蝶 + 増殖する生命 II +
花と人、コントロールできないけれども、共に生きる

味がない文化砂漠と言われていたんですが、実際には多くの人に来てくれてるんです。

田村：行列ができていますと聞きましたよ。

猪子：そう。行列はできてるし、著名人もたくさん来てくれて、いろんな人がツイッターで発

信してくれて、さらに人が来てくれて。最初は7月1日で終わる予定だったのに、12月18日まで延期になったんです。

田村：9月に徳島経済同友会の視察でシリコンバレーに行くんですよ。ちょうど開催中ですね。

猪子：ぜひ。

田村：ウォールストリートジャーナルにも、大きく取り上げられていましたね。

猪子：ええ。「シリコンバレーの富裕層がついにアートを買いはじめた」という見出しで、イギリスの新聞ガーディアンは「文化砂漠のシリコンバレーについに、アートギャラリーができた」といった取り上げ方です。

田村：シンガポールには常設の展示があるんでしょう。

猪子：マリーナベイ・サンズですね。「アートサイエンス・ミュージアム」という蓮の花の形の建物の地下2階がうちの常設展示「FUTURE WORLD : WHERE ART MEETS SCIENCE」で、1,500平米くらいの広さかな。(2016年8月5日からは、世界で2か所目となるチームラボ常設展が、韓国のソウル、ロッテワールドで1,700平米の規模でオープン)

田村：広いですね。シンガポールは国家戦略として、チームラボをインバウンド誘致に活用しようという感じですね。

猪子：シンガポールはデジタル化された未来都市、デジタルイズド・シティのようなものを計画していて、その中心がマリーナベイ・サンズなんですね。通信のインフラなどを強化して、車を完全オンライン化して、通行量によって渋滞を避

「FUTURE WORLD : WHERE ART MEETS SCIENCE」



シンガポール アートサイエンス・ミュージアム



Graffiti Nature

けて行き先を変えたり、通行料金をリアルタイムで変更したり、といったことを考えています。

田村：国の面積が小さいからやれるということもあるんですが、時代を先取りした戦略がすごいですね。

猪子：小さいからできるということではなくて、リーダーが優秀だったんでしょう。何もなさ過ぎて、放っておくとダメになるから。

田村：危機感ですか。日本も見習わないといけないですね。

2015ミラノ国際博覧会（ミラノ万博）では、日本館に展示された「HARMONY」と「DIVERSITY」の2作品のうち、「HARMONY」がBEST PRESENTATION賞（「EXHIBITOR Magazine's Expo 2015 Awards」）を受賞しましたね。

猪子：日本館自体も展示デザイン部門の金賞をもらいました。

田村：W受賞ですか。「HARMONY」は、稲穂をかき分けながら日本の自然を感じるというものです。ニュースの映像で見て、すごくミラノへ行きたかったんですが、さすがに行けなくて。日本で展示する可能性はありますか。

猪子：あれは展示にすごくお金がかかるから、なかなかできないんですよ。

田村：トルコやオーストラリアでも展示がありますね。

猪子：トルコは、イスタンブールで「teamLab：Between Art and Physical Space」（2016年3月4日～10月16日）という展覧会をやっていて、シドニーはもう終わっちゃったけど、「Ultra Subjective Space」（2016年3月17日～4月17日）を、オーストラリアでは一番有力だと言われているギャラリーで。

田村：それぞれ大好評ですか。

猪子：そうですね。特にシドニーはすごく売れました。

田村：世界の人から見た日本人アーティストの一番人気は、猪子さんだと言われているそうですね。

2015年ミラノ国際博覧会 日本館



HARMONY, Japan Pavilion, Expo Milano 2015



DIVERSITY, Japan Pavilion, Expo Milano 2015

チームラボ『生きる』展(台北Kaikai Kiki Gallery)



生命は生命の力で生きている



百年海図巻 アニメーションのジオラマ

猪子：いえいえ。村上(隆)先生がいらっしゃるのです。はるかに上ですよ。他にも同じギャラリーに奈良美智さんもいらっしゃいます。

村上先生が作った台湾のKaikai Kiki Galleryで2011年に展示させてもらったのが、海外でのアートデビューだったんです。欧米でのデビューは、2014年のニューヨークのPace Galleryだから、まだまだルーキーなんです。村上先生や奈良美智さんは大御所です。

田村：ルーキーにしては、すごく目立ってますよ(笑)。

+

×

+

×

デジタルアートがめざすものは深い感動

田村：日本だけでなく、海外でチームラボの作品がそれだけ高い評価を受けているということについてですが、今までのアート作品は、一方的に、しかも静かに見るというイメージじゃないですか。でも、チームラボの作品は、見る人が作品と関わり合ってどんどん中身が変わっていくところがすごく新鮮ですね。特に、子どもたちがきゃーきゃー言いながら、インタラク



小人が住まうテーブル



お絵かき水族館

ティブな作品を楽しんでいて、アートを見るという概念を覆したというか、すごい衝撃だったんですよ。そういうところが世界共通で受け入れられているんじゃないかと。それから、チームラボの作品は、江戸時代に世界を驚かせた伊藤若冲^{じやくちゆう}の絵からインスパイアされたものなど、日本の美をモチーフにしたものもわりと多い感じがしますが。

猪子：そうでもないですよ。最近、特に、海外で展示しているものは、もうちょっと日本の美を抽象化したものですかね。

田村：そこではなくて、インタラクティブな部分が受けているということですか。

猪子：インタラクティブだったり、プロジェクトンマッピングみたいなものは、それぞれの国にいっぱいあるんですよ。でも、そういう表面的なテクノロジーではなくて、アートとして成立するものを作り続けてきたから、世界中で評価されているんだと思います。それを言い出すとアートとは何かという話になるけれど、それはいったん置いて。でも、表面的な驚きだけでなく、もうちょっと深い感動のようなものをめざして、アートとして作り続けてきたのが理由だと思っています。

田村：なるほど。深いアートと科学、テクノロジーの融合が世界を魅了しているんですね。

+

×

+

×

人間に興味があった少年時代

田村：子どもの頃の話を知りたいんですが。高



1歳4か月頃

校卒業まで徳島ですが、どんな子どもでしたか。

猪子：普通の子供ですよ。少年ジャンプ読んで、ファミコンやってました(笑)。

田村：子どもの頃は、どんなことに興味や関心がありましたか。

猪子：人間とは何かというのを知りたいと思ってました。

田村：へえ。いつ頃から？

猪子：中学生か高校生くらいかな。

田村：なかなかそんな心境になることはないと思うんですが。

猪子：人間は、みんなが思っているようなものではないと思っていたから。だから知りたかったんですよ。

田村：猪子さんの今の年齢になって、ある程度わかってきたという感じはあるんですか。

猪子：永遠にわからないかもしれないけれど、高校生の頃よりは少しだけわかったと思う。それでも、まだまだ全然わからないけど。

+ **×** **+** **×**

インターネットへの関心から起業へ

田村：今の仕事につながるような興味のきっかけは何かありましたか。

猪子：NHKの「新・電子立国」というテレビ番組ですね。



チームラボ代表 猪子寿之氏

田村：私も見ましたよ。本にもなりましたね。それを見て、刺激を受けられたわけですか。

猪子：最終回で、マーク・アンドリーセン(アメリカ合衆国のソフトウェア開発者)が、インターネットやブラウザの話をしていて、そこでインターネットを知ったんですよ。1996年6月だから、大学に入った後くらいかな。

田村：大学卒業の時に、就職せずにベンチャーで5人のメンバーで起業された理由は？

猪子：何か意味のあることをやれたらいいなと思っていたし、自分が就職するイメージも沸かなかったの。

田村：たしかにそうかもしれないですね(笑)。

猪子：どういう意味ですか(笑)。

田村：決められた枠の中でやるよりも、自分の自由な個性や価値観でいろいろやられるタイプだと思ったので。仲間が5人いてよかったですね。



高校生の頃



徳島 阿波踊り

猪子：よかったね。半分だましましただけど。

田村：吉村さん(取締役吉村譲氏)は徳島出身ですね。

猪子：家が近くて幼なじみで、高校の時もいつも一緒にいたから。

田村：チームラボは21世紀になってからできた会社ですが、最初はどんな仕事をしてましたか。

猪子：レコメンデーションエンジン(購買履歴やアクセスログからユーザーのニーズに最適な商品や情報をくみとっておすすめるソフトウェア)を作っていたんだけど売れなくて。遺伝子の解析、確率モデルで要因遺伝子を見つけるということ、大企業の下請けでやったりしました。仕事の範囲外で方法論まで見つけたら、クライアントが「それはうちの権利だから譲ってもらわないと困る」って。まあいいやって譲ったんだけど、そういう日本のスタンスの会社とイノベティブな仕事をするのに嫌気がさして、ホームページを作ったりしました。

+ **×** **+** **×**

グローバルな発想の広がりがチームラボ飛躍へ

田村：やっぱり軌道に乗るまでは、結構大変だったんですね。大きく飛躍したターニングポイントは何ですか。

猪子：わからないなあ。でも、海外で展覧会やったことが大きな飛躍かもしれない。アートは創業期から作っていたんだけど、あまり出口がなくて。でも、2011年に台北の村上さんのギャラリーで展示会をやらせていただいて、グローバルだと圧倒的に受け入れられるんだというのがわかったんですね。

田村：台湾の国立美術館では、外国人初の個展を開催されたし、パリ・ルーヴル宮のフランス国立装飾美術館でも展示されたり、活躍の舞台を広げてこられました。シンガポールと関わることになったのも大きいですか。

猪子：というよりも、みんなの発想がグローバルになったのが大きいのかもしれない。新しい

概念とか新しいジャンル、あんまりジャンルがないものや新しい領域が存在するから。日本と海外という分け方だとちょっと語弊があるから、多分グローバルとローカルということなんだと思う。もちろん、海外にもローカルな人々がいっぱいいるけど、グローバルな人たちもいて、グローバルに通用するものにしか興味がない。ローカルな人ってというのはローカルにだけ通用していてもいいんだよね。海外はグローバルな人たちがけっこういるんだよね。状況がそうさせているんだと思うけれど、日本はあまりグローバルな人がいないんだよ。

田村：海外のグローバルな人たちの間で、チームラボの良さを理解するという動きが出てきて、それがようやく日本にも浸透してきたという感じなんでしょうね。

チームラボの代表としてのお話をうかがいたいんですが、社員は何名くらいですか。

猪子：400人位かな。

田村：そんなに増えてるんですか。みなさん、正社員ですか。

猪子：正社員だけじゃなく、パートナーといって、プロジェクトごとで契約しているメンバーも含めて。

ここのオフィスだけで300人近くいて、この周りにまだオフィスが何か所かあります。

田村：それだけ規模が大きくなると、マネジメントも大変ですね。マネジメントの専門家もいるんですか。

猪子：いないですね。

田村：その辺はわりとフリーなんですか。



FaceTouch



チームラボカメラ

猪子：どうなってるんだろうね(笑)。昔と違ってオンライン化されて、ネットワークが前提だから、マネジメントの概念も変わったのかもしれないね。

田村：海外にも拠点はあるんですか。

猪子：拠点ではなくて、台湾とシンガポールに窓口を置いてます。普段はシンガポールに一人だけいて、台湾に移っている時もあるけど。

+

×

+

×

チームラボは多様性が特徴

田村：チームラボという会社の理念は、いろいろな場面で話されていますが、一言で言えば、「共創」とか「集団的創造」ということですか。

猪子：そうです。



オフィス風景



オフィスでの打ち合わせ

田村：異文化の専門家たちが、知恵を出し合って作っていく過程を楽しむ会社ということですか。プログラマーやエンジニア、数学者、建築家、デザイナー、アニメーターなど様々なスペシャリストが集まってらっしゃるそうですね。

猪子：いろんな才能が集まって、チームで仕事をしています。ラボというのは研究室とか実験室ですから、チームラボという名前もそこからきています。

田村：仕事の範囲も広がってきてますか。

猪子：売上の6～7割は企業のWEBサイトの構築やシステム設計ですよ。他には、スマートフォンアプリの開発やアートの制作。イベントやったり、店舗の内装やったり、オフィス作ったり、最近は建物の設計もやり始めて、オフィスビルも設計しています。

田村：以前見せてもらいましたが、「チームラボハンガー」に掛かった洋服などの商品を手にとると、ディスプレイにその商品のコーディネートされた写真や動画が表示されるという体験もおもしろかったですね。新しい空間でショッピングがより楽しくなりそうです。

+

×

+

×

徳島LEDアートフェスティバルは 街をまるごとアートにする第一歩

田村：デジタルアートでは、今までのものを超えた新しいものをどんどん創造されていくんだ

ろうと思いますが、今後挑戦したいものはありますか。

猪子：街をまるごとアートにするようなことがおもしろいなと思っているんですよ。

デジタルって、言ってみれば光と音で、あとはセンサーや通信で、どれも物質じゃないでしょう。街や自然をそのまま、物理的に変化させたり壊したりせず、アート空間に変えられると思っているんですね。今まで、基本的に人間がつくるものは物質だから、大げさに言えば自然と対立するんですね。でも、非物質のデジタルアートだから、そのままのものを生かして、街を街のまま、自然を自然のままアートにするということができると思いますね。

徳島LEDアートフェスティバル2016
「チームラボ★光る川と光る森
徳島ライトシティアートナイト」



城跡の山の呼応する森



リバーサイド クリスタルツリー



呼応する球体のゆらめく川



Crystal Universe

今年の冬の徳島市のLEDアートフェスティバル2016(12月16日～25日)では、徳島市中心部の川と公園の森で「チームラボ 光る川と光る森 徳島ライトシティアートナイト」という展示をやります。

田村：全国、あるいは世界でいろいろ展覧会などをやっているチームラボにとっても、街のいろんな風景を使ってデジタルアートを展開するというのは、徳島のLEDアートフェスティバルが、世界初と言ってもいいんですよ。

猪子：その通りです。

田村：徳島のホテルの人が、台湾の旅行社にインバウンドの誘致に行った時に、LEDアートフェスティバルのチラシを見せたら、チームラボだと聞いて、「30人くらいのツアーを組みましょう」と、すぐ反応があったらしいです。せっかくチームラボがやるんだから、徳島に海外の人を呼び込めるようなフェスティバルにしたいと思っています。

猪子：ぜひ、呼びたいですね。

田村：チームラボは、徳島県が進めているデジタルアート・ミュージアム構想の一環で、あすたむらんど徳島に2年連続、作品を出展しておられますし(今年の作品は「Dance Through the Crystal Universe」)、クリエイターや大学生向けにワークショップを開いたり、猪子さんが直接、小学校でデジタルアート体験授業を行っておられますね。夏には、川口ダム(那賀町)の自然エネルギーミュージアムなどで、デジタルアートを展開される予定と聞いています。



また、12月の徳島LEDアートフェスティバルに合わせて、今年創立120周年を迎えた阿波銀行が、本店にチームラボの作品「Flowers in the Sandfall」を常設で展示する計画も進んでいます。ご出身地である徳島と猪子さんとの関わりが増えて、とてもうれしく思っています。
今後、徳島でやってみたいことを最後に。

猪子：さっきの話の続きになるけど、今回の冬の徳島市だけでなく、消滅集落や限界集落を、丸ごとアート空間にするというのをいつかやりたいですね。それから、山の中の滝や、鳴門の渦潮に、非常に興味があります。

田村：ぜひ徳島でやれるように、われわれも盛り上げたいですね。ありがとうございました。

DMM.PLANETS Art by teamLab



人と共に踊る鯉によって描かれる水面のドローイング - Infinity

(2016年6月10日 チームラボオフィスにて対談)

(対談編集 元木恵子)